

千手観音坐像と千手観音立像

三十三間堂の中心となる本尊は、すべてを見通し、すべてに慈悲をかける観音菩薩である。観音は大乘仏教の重要な存在であり、衆生を救済へと導こうとするその決意の強さから、広く崇敬されている。その能力は、一部には、33 の異なる姿になることができるという能力に由来している。そのそれぞれが、異なる場面に適した姿である。11 個ある顔で、複数の方向や方角を見ることができ、千本の腕は導きと癒しをもたらす。観音信仰は 11 世紀頃から日本での人気が非常に高くなった。その当時、人々は世界と仏法が避けることのできない衰退（末法の世）に入ったと信じていた。そのような状況において、菩薩の救済の力は、自由を得るための唯一の道であると広く信じられていた。

三十三間堂の本尊の観音像は 1255 年頃に高名な仏師・湛慶（1173～1256 年）の指示のもとでつくられた。複数のヒノキの木材を組み合わせた寄木造りで、完成した像は漆塗りしてから金箔で仕上げられた。観音の 1000 本の手は 20 対の腕で表現されている。40 本の腕はそれぞれが 25 ある並行世界に存在するものと考えられており、その合計が 1000 になる。瞑想の姿勢で座った観音の合掌した手と第三の目は、悟りを開いた存在であることを示している。

本尊の両側には、1000 体の観音像が並んでいる。これらはすべて本尊の観音像と同じような方法と様式でつくられている。これらは本尊よりもはるかに小さいが、大きくないかわりに、細かいつくりで、それぞれが個性的な表現となっている。実際、ひとつひとつの像はそれぞれ非常にユニークである。手には様々なものを持っている。人々を救済に導くための道具を持っているものあるし、また塔や蓮の花など、仏教の図像学において一般的な持物を持っているものもある。